

日本気象学会奨励金を受領して

この度の奨励金受領にあたっては、「私のようなものがいただいて良いのだろうか。」というのが率直な感想で、うれしさ半分、恥ずかしさ半分といったところです。

これまでの調査・研究の実績といっても、仕事をしていく中で生じた疑問や興味を持った事例について調査したものを、気象官署で年1回行われる地区研究会で発表してきた程度のものでした。

今、その内容を振り返ってみますと、知らないと言うことは恐ろしいもので、解析手法の誤り、層別化のない統計、こじつけなどのオンパレードで、これを推薦委員の方々が目を通されたかと思うと、まさに穴があったら入りたい心境になります。「今後はもっと勉強し質の向上を図りなさい。」という激励（お叱り）の意味と解釈し奨励金を受けたいと思います。

今回対象となった研究項目「海陸風卓越時の網走の最高気温」について簡単に内容を紹介いたします。

このテーマは網走地方気象台に勤務していた平成4年から取り組み始めたものです。

網走市はオホーツク海に面しており、流氷が融けたばかりの冷たい海面と陸上の温度差で、春先には海陸風循環が卓越します。海風侵入時に気温が急激に下降するので、気温の日変化はカルデラ型となるのが特徴です。気温を予想するにはMOSガイダンスなどの参考資料はありましたが、海陸風が卓越する時期の精度はあまり良くなく、予報者は風の予想とともに頭を悩ませていました。

初年度は、海陸風が卓越する時の網走の最高気温の予測式を求めることを目的とし、気温の変化型を分類し、900 hPaの風で各型を分別化し、それぞれの型での予測式を導き出しましたが、海風卓越時のものの相関は良くありませんでした。

この部分を改良するには、海陸風循環のメカニズムの解明と海面水温のデータが不可欠と考えられました。

しかし、海面水温は気象庁海面水温旬報のデータしかなく、立体構造を知るにも高層観測機器はなく、せいぜい近郊の天都山（標高207 m）に気温と湿度の自記記録器を設置するのが精一杯。この調査も第1報で終わりがなと諦めていたところ、翌年から札幌・函館・網走の3気象台の共同で、オホーツク海の霧と風の調査を実施するという計画が飛び込んできました。海上で観測を行う函館海洋気象台の観測船「高風丸」には高層観測機器と係留気球観測装置があり、まさに渡りに船でした。

計画の立案段階で、海風の発生個所を知るために網走沖を矩形に航行してもらい、その間、対流混合層の発達過程と海風前線の微細構造を捕らえるために早朝から3時間間隔の係留気球観測を要望しました。前者は採用されましたが、後者は観測者の負担が大きすぎるので6時間間隔に修正になりました。

さて、観測結果ですが、運良く海陸風が捕らえられ、内陸と海上の気温差がある値になるのを境にして海風の侵入・後退が始まることと、海風の他に陸風が海上で転向して戻ってくる陸性海風が存在することがわかりました。立体構造については、ゾンデが陸風領域のみを飛揚したため残念ながら把握できませんでした。

当初の目的だった最高気温予測式の改良については、この調査だけでは突破口を見つけられず、私も転勤で網走を離れることになりました。しかし、海陸風循環のメカニズム解明については、その後も網走地方気象台の職員に引き継がれ、立体構造の一部が把握されるに至っています（山下ほか、平成6、7年道東地区研究会）。

共同研究は平成8年度をもって終了しましたが、オホーツク海には、オホーツク海高気圧時の霧や霧雨、ヤマセなど調査対象は事欠がなく、今後、ロシアの200海里内での観測が自由に行われるようになれば、益々、新たな知見が得られることになるでしょう。

さて、話は変わりまして奨励金の行方ですが、調査研究の環境整備に使わせていただきました。といっても、パソコンやソフトに化けたものではありません。研

究会の原稿締切が近づく度に、職場からの帰りが遅くなり、3人の子供の面倒を放り出してきた前科と、たぶんこれからもそうである詫びを前もって入れておくということで女房に献上しました。「お父さん、すごいわね」。金額がすごいという意味のようでしたが、妻子ともども大層、喜んでくれたのが、今後の一番の励みと

なったのは言うまでもありません。

最後になりましたが、調査研究は職場の先輩のご指導・ご助言また共同研究者の協力なくしてできるものではありません。推薦していただいた関係者の皆様を含めここに厚く御礼申し上げます。

(函館海洋気象台 四宮茂晴)